

まさかの「修行」——後日譚

西山裕子
(2008年度D)

「関学英文」——ここは私にとって修行の場である。

その昔、東京で一口大のサンドイッチにジュースを囲み穏やかに修士課程を修了したあの日、当時の指導教授からこんな質問をされた。「博士課程にはお出でにならないの」。学部を卒業して直ぐに進学した大学院2年間のあの凝縮された日々を思うと「これ以上もう勉強できそうにない」。それがその時の正直な気持ちだった。合格で浮かれたのも束の間、大学院生になった私に身も凍るような授業（大学院の演習）の数々が待っていた。

時を経て関西に戻った当初はまさか再び、しかも今度は後期課程に進学するとは考えもしなかった（入学した時の感激を表した私らしい文章は『英米文学会会報』のバックナンバーに記載されています）。比較文学特殊講義では *OED* を引きながら原文を丁寧に読むことの大切さを学ばせて頂いた。社会人でありながら再び原書に向き合える喜び。それがきっかけとなって「関学英文」に初めて足を踏み入れた私はこの場で第二の洗礼を受けることになった。

「まさかこれで帰るとちゃうやろな」。初日の夜の一次会終了後、当時初対面だった H 岡先生からの有難いお言葉。大学院の入学式当日に「歓迎会」がまさかこのような形であろうとは（「夜」まであるとは葉書には書かれてはいなかった）！こうして夜の街から新たな修行が始まった。少し真面目な話になるが、大学院に在籍中にはどんなに忙しくても一年に一度は学会発表と投稿論文を行うことを自らに課していた。年数と共に確かに「数は打てた」。が、入学から数年が経ち一つの論文としてまとめなければいけない段になって初めて気が付いたのは、それらが一つの核を持つ論として繋がって

いないということだった。勉強量が少なすぎたことに加えて、おそらく入学当初の目標の設定が甘かったこともその一因であろう。時すでに遅し。結果、入学当初には考えもつかなかった格闘を余儀なくされることになった。大学院研究員と言えば論文の執筆と並行して様々な仕事をこなさなければならないのは言うまでもないが、ここで初めて白状すれば、それまでに書き溜めていたものの8割以上を書き直すという地獄を味わった（この仔細は大変失礼な文言で以前『会報』に投稿させて頂きました）。

関学英文での日々を綴るのに修行という言葉はあまりにも陳腐な表現かもしれない。しかしながらこう敢えて呼びたいのはあの衝撃の日以来、ある言葉が胸にぐっさり棘のように突き刺さっているからだ。「面白いものを書いて」。笑みを浮かべながら発せられるこの一言（誰とは言えまい）。実にこの言葉を論文「再」執筆当初から何度も聞いている。面白い？——簡単なようだが実行するには難しいこの言葉。読み手にとっての「ぶっとんだ笑い」をどのようにしたら書けるのか。衝撃的な一例を挙げると、現指導教授から初めて論文指導を受けた時のこと。遡ること数年前。「もっと面白いこと言えないかな……。例えば、ブロンテが『お尻がかゆい』と作品の中で言ったとか」（文学史上ではブロンテ（C）は一応、十九世紀の「女流作家」です！）。

前回執筆した『会報』の記事に補足を加えさせて頂けるならば、あの時にも実はこんな注文があった。最初に提出した文章（論文指導に対する感謝の言葉の羅列）は面白くないために即刻没。思い返すと、先生が髪を切ったことをストレートに指摘したら『「シラミでもわいたんかと思った」くらいの冗談言えんのか』と返されたこともあった（これが、その「笑い」だったのか！）。ほぼヤケクソになって書いた、戦々恐々とした挑戦状でやっとの「合格」。が、でかでかと記載されたあの文面は「私らしくない」傑作となって過去の会報のファイルに残ることになってしまった（これについてはとある先生から不覚にも（私が書く）論文よりも面白い、とのお言葉を頂戴してしまいました）。あれから数年。今も修行中だ。